

「同和問題（部落差別）は一部の特定の人の問題であり、自分とは関係のない問題である。」という意見がありますが本当にそうでしょうか。同和対策審議会答申で指摘されているように、部落差別の背景には、日本の社会・経済・文化体制が存在しています。また、「自分には関係ない」とか、「一部の人の問題」と考える無関心は、差別を容認し、問題の解決を遅らせることにつながります。

生活の中には、同和問題（部落差別）と関わりのある様々な場面があり、それらは一部の人のみに関わりのあることではありません。この問題を自分に関わりのある問題と捉えることは、自分自身の意識や態度、行動について考えるきっかけとなります。

これまで述べてきたように、同和問題（部落差別）の解決に向けて社会的な取り組みが必要であることは間違いありません。しかし、これらの取り組みを、真の差別解消につなげるためには、個人個人が同和問題（部落差別）について正しい認識を持ち、それを自分のこととして考え、差別をなくすために行動できる態度を身に付けることが求められます。

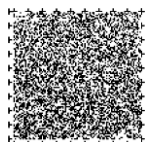
## 1 同和問題（部落差別）について正しい認識を持ちましょう



同和問題（部落差別）には、誤った知識や予断・偏見が強く関係していることが多くあります。同和問題（部落差別）について、次のような誤った認識を持つことがよくありますが、それらに惑わされることなく、正しい認識を持つことが大切です。

### （1）同和問題（部落差別）は、教えるからかえって差別が広がるのでは？そっとしておけば自然になくなるのでは？

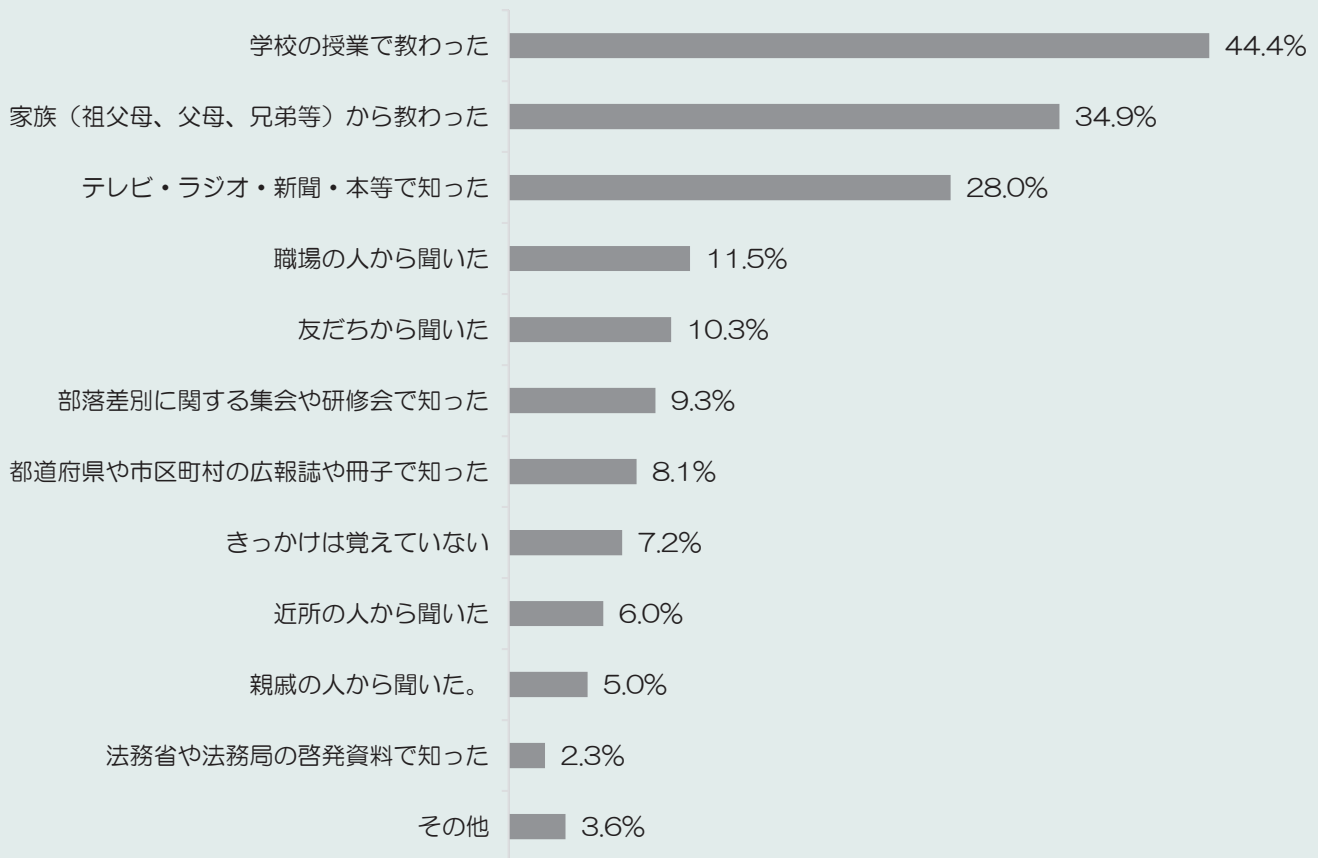
「同和問題（部落差別）は、知らない人にまで教えなくてもいいのではないか。」「教えるから、かえって差別が広がるのではないのか。」という考えを持つ人がいます。これは、いわゆる「寝た子を起こすな」という差別の現実を避けて通る姿勢から出てくる考えだと言えます。しかし、本当にそっとしておけば、同和問題（部落差別）は自然に解消していくのでしょうか。



令和元（2019）年に法務省が行った「人権に関する意識調査」によると、「同和問題（部落差別）について初めて知ったきっかけは何からか？」という問いに対し、

「家族・親戚や近所、職場の人や友だちから聞いた。」と答えた人が67.7%でした。一方で、「テレビ・ラジオ・新聞・本等から。」と答えた人が28%、「学校の授業で教わった。」と答えた人が44.4%、「自治体の広報誌や冊子等から。」と答えた人が8.1%、「部落差別に関する集会や研修会で知った。」と答えた人が9.3%でした（複数回答可）。つまり、教育や啓発を通して同和問題（部落差別）を学ぶ以外にも、様々な機会に周りから同和問題（部落差別）を知る人がいるという結果になっています。つまり、教育や啓発をやめたとしても、何らかの形で同和問題（部落差別）を知る機会は数多くあり、誤った認識を防ぐことはできないと考えられます。このことは、解放令によって身分制度がなくなった後、同和問題（部落差別）についての教育や啓発がほとんど行われない時期が約100年間続いたにも関わらず、部落差別が解消されなかったことから分かります。したがって、「教えるから差別が広まる」という考え方は誤りです。

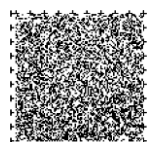
### 同和問題（部落差別）を知ったきっかけ（複数回答）



（法務省「2019年度 人権に関する意識調査」より）

また、これまで述べてきたように様々な形で差別が残っている社会においては、同和問題（部落差別）について正しく理解をしておかないと、何かの機会に事実に基づかない情報に接し、それによって予断・偏見が形成され、差別を生みだすおそれがあります。

同和問題（部落差別）を知らない人が正しく認識すること、あるいは、誤った認識を持っている人が、その間違いに気づき、その認識を改めることが必要です。



## (2) もう同和問題（部落差別）は解決したのでは？

昭和 40（1965）年の同和対策審議会答申に基づき、昭和 44（1969）年から平成 14（2002）年 3 月末まで 33 年間にわたって実施された同和対策事業特別措置法等による事業は終了しました。

しかし、平成 28（2016）年施行の「部落差別の解消の推進に関する法律」にも部落差別が現在もなお存在していると明記されています。また、令和 2（2020）年に法務省が公表した「部落差別の実態に係る調査結果報告書」からも部落差別の被害が存在していることが分かるように、現在でも、教育・就労・経済状況などの生活実態面には、まだ課題が残されています。

また、心理的な面では未だに差別意識が残っていることによって、これまで述べてきたように様々な差別事象が起きています。

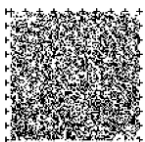
差別が存在する限り、国や県、県民が一体となってその解決に努めなければなりません。特別措置法が失効したので同和対策は終わった、同和問題（部落差別）は解決したといった考えは全くの誤りです。

## (3) 分散して住めば差別はなくなるのでは？

「分散してばらばらに住めば出身がわからなくなり、差別もなくなる」という考えがありますが、本当にそうでしょうか。

本来、誰もが自分の住みたい場所に住む権利を持っています。しかし、同和地区の人々が自らの意思で他の地区へ移り住んだとしても、身元調査を受けて同和地区出身であることが明らかになれば、結婚などに際して差別されてしまうという厳しい現実があります。また、分散して住めばよいという考え方は、差別される側に差別の原因があるということになり、差別意識を温存することにつながります。さらに、自分の意思に反して分散して住まざるを得ないとしたら、憲法で保障された基本的人権（居住・移転の自由）の著しい侵害になります。

このように、差別意識をそのままにしておいて、単に住む場所を変え、分散することでは、同和問題（部落差別）の根本的な解決にはならないのです。どこに誰が住んでいても、全ての人が差別をすることがない社会をつくるのが、何よりも大切なことです。



## （４）同和問題（部落差別）は、同情心があれば解決するのでは？

「同和地区の人は、差別されて気の毒だ。かわいそうだ。」という同情心には、裏返していえば、「私は同和地区に生まれなくてよかった。」という気持ちや、「自分が差別されない立場にある」という優越感が潜んでいることもあります。自分や身近な人が差別されたり、いじめにあったりしたとき、かわいそうだというだけでは済まされないはずです。

差別をされている人の苦しみや痛みも自分の苦しみや痛みと同じように感じ、お互いにその尊厳を認め合い、人が人を差別することのないように積極的に行動していくことが大切です。

## （５）同和問題（部落差別）は、自分には関係ないのでは？

同和問題（部落差別）は自分には直接関係がないという考えを持った人がいます。しかし、「自分は差別していない、差別なんて関係ない。」と思っている人でも、自分の心の中の差別意識に気づかずに、ふとした時に人を傷つけたり、傷つけられたりしている場合があります。また、「差別はいけないことだ。」と口では言いながら、自分に直接関わる問題になると、昔ながらの迷信や因習にこだわったり、偏見でものを見たり判断したりする場合があります。

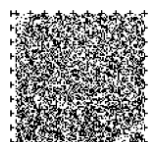
同和問題（部落差別）の解決のためには、私たち一人一人が、自分自身で考え判断するという主体性のある生活態度や、差別を許さないという価値観を持って行動していくことが必要です。この取組みは、他のあらゆる差別を許さないということにつながっていきます。

# 2 日常生活の中で「人権感覚」を磨きましょう



私たちは、血筋、家柄、迷信等にこだわるなど、不合理な考えで、判断したりしてしまうことがあります。日々の生活の中で、正しく理解をしようとせず、噂や憶測で思い込んでいることはないでしょうか。

差別や偏見をなくすためには、正しく理解・認識するとともに、自分自身で考え、行動していく態度を養うことが必要です。また、身の周りで偏見や差別にあったとき、周りの人たちと皆で考え、行動していく勇気と努力が大切です。



## (1) 思い込みや偏見をなくしていきましょう

「女のくせに料理もできないのか」「年寄りのくせにそんな派手な服を着て」「子どものくせに生意気なことを言うな」などと、言われた経験はありませんか。

しかし、よく考えてみると、これらに「女は料理ができるものだ」「年寄りには地味にしておくものだ」「子どもは素直に言うことを聞くものだ」などといった思い込みが潜んでいます。一人一人の個性を見るのではなく、集団やグループをひとまとめに考え、固定的にレッテルをはってしまうのは、偏見や差別につながります。

偏見は、科学的な根拠のない話や噂などを安易に受け入れたり、物事を一面的にしか捉えずに、よく確かめようとしなかったり、自分自身で考え、判断しなかったりする態度から生まれます。

思い込みや偏見をなくすには、生活の様々な場面において、物事を正しく捉えようとする意欲、相手の立場や気持ちを分かろうとする姿勢、物事を表面的に捉えずに深く掘り下げる考え方を持つことが大切です。

## (2) 迷信や周囲の反応に捉われず、自分自身で考え、判断しましょう

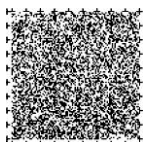
物事を決めたり、判断するとき、「科学的には何の根拠もない、おかしい」と感じて、「周りの人はどう思うだろうか」といったことに捉われたり、そうした考えを他人に押しついたりする傾向がありはしないでしょうか。

広い視野を持ち、他人によりかかったものの見方をせずに、きちんとした根拠に基づいて、自分自身で考え判断することが大切です。

## (3) 次の世代の子どもたちに人権を尊重する心を伝えていきましょう

家庭内での、日頃の何気ない家族の対話が、子どもの人生に大きな影響を与えられます。実際、差別意識や偏見は、子どものうちに、親など身近な人から聞かされてつくられた場合が多いのです。

大人たちが、子どもたちに誤った知識を教えることなく、相手を尊重する心を持つよう、普段から心がけ、言葉や行動で示していきましょう。



一人一人の力は小さなものかもしれませんが、家庭、職場、地域社会などを通して日頃から人権感覚を磨くことが、一人一人の生き方や価値観を尊重できる社会



の形成につながっていきます。これまで述べてきたように、部落差別が残ってきた原因として、歴史的・社会的な背景などがありますが、どのような背景があるにしても、差別を容認することはできません。端的に言えば、差別をする人の存在がいつまでも同和問題（部落差別）を残しているのです。このことは、同和問題（部落差別）に限らず、全ての人権問題にも共通していることです。

同和問題（部落差別）は、「差別をされる側」の問題ではなく、「差別をする側」の問題であり、その中には、自分には関係ないといった無関心であることも含まれます。なぜなら、無関心は結果的に差別の存在を許してしまうことになるからです。

「誰かがなくしてくれる」では差別はなくなりません。「私」自身が差別をなくすためにどう行動するのが大切です。まず、自分にできることから始めましょう。

